

日本画部門審査評

今回は昨年から9点増の63点もの応募がありましたが、その中から33点が入選となりました。出品作はいずれも、身の周りの風景や人物、素材をテーマにそれらを独創的な構成で描いた力作でした。審査ははじめ挙手により、次いで最終入賞の9点を決定するまで、何度か協議を重ね選考を進めました。話し合うなかで、作品の良さや特徴がより明らかになっていき、最終的には審査員皆が納得できる結果となったと思います。

最優秀賞の《「生く」と「生きる」との対話》は、淡く透明感のある色彩が印象的な作品です。細やかな線描の上に色を置いていく丹念な描写が秀逸で、細部と画面全体の調和の絶妙なバランスに高い技術を見て取ることができる秀作でした。優秀賞(三重県議会議長賞)《高田本山乳銀杏》は古木の力強さを墨を主体に力強く表現し、構成力に優れた作品でした。優秀賞(三重県教育委員会教育長賞)《蒼い午後》は数少ない人物画のひとつで、独創的な画面構成と物語性を感じさせる点で、出品作の中でも異色の作品でした。岡田文化財団賞《連(ハシドイ)》は、木に覆われた建物を見上げる視点で描き、陽光の明るさを表現する白の使い方や、濃淡の強弱をつけた色づかい、ガラス窓に映った青空など、練られた構成が際立っていました。三重県市長会長賞《木霊》は縦長の画面に、下から見上げる視点で木の幹と枝を力強くかつ繊細に表現し、細やかな線描と色彩、構図が目を惹きました。三重県町村会長賞《夏草》は、丁寧な対象観察にもとづき、日本画の顔料の鮮やかさが存分に生かされた作品。今回の出品作の中でも色使いが際立つ力作でした。すばらしきみえ賞《水辺の譜(斎宮 祓川)》は、三重県、祓川の川面に花びらが漂うさまを、淡く柔らかい色彩を重ねて描き、刻々と変化する水面の表情を詩情豊かに表現しています。for your Dream 賞《追憶》はのどかな山村風景を、墨と淡彩で描いた作品ですが、馨水(どうさ)の効果を生かして造形した棚田の表現の工夫や家々の細やかな描写が巧みでした。ニュージェネレーション・自然の恵み賞《海との遭遇》は、ウミガメと対面する少女を描いた作品で、シンプルな構成ゆえに一層作者の思いがストレートに表現された快作で今後の活躍が楽しみです。

50号という限られた大きさ、日本画の素材という制約がありながらも、それぞれに構想した世界が個性豊かに表現されており、その表現の多様さに驚かされました。出品された皆さまが、みえ県展を通してますます豊かな表現世界を拓いていかれることを期待しています。

日本画部門審査主任
飯尾由貴子

洋画部門審査評

今回洋画部門では 187 点の応募があり、その内 79 点を入選といたしました。入選率は 42.2%でした。全体的には、多様性に富みそれぞれのリアリティが表れた良い作品が多かったと思います。実に様々な様式による試行が見られ、その多くが素材や技法にこだわったユニークな作品として結実していました。この多様性は魂の自由の証、つまりそれぞれの作り手がそれぞれの文脈や価値観を尊重していることの証であり、大変素晴らしきものです。審査をしてもとても楽しく、心が洗われる思いでした。

最優秀賞《2階建ての家で、ずっと。》は、形態や色彩などの造形要素が大変簡素でありながら、不思議な奥行き感を生み出す鮮烈な作品です。優秀賞（三重県議会議長賞）《未像》は、身体に関する感覚を拡張するようなイメージを持つ絵画としてのメチエに優れた秀作です。優秀賞（三重県教育委員会教育長賞）《津の街 白山町 大三 2026》は、刻印のようなリズムカルなストロークで解放性と存在感を同時的に表現した印象的な作品です。三重県市長会長賞《気配》は、グレイッシュな色彩のコントラストによって抜け感のある心地よい空間が演出された幻想的な作品です。三重県町村会長賞《アマゾン怪魚上流にのぼる》は、主題、構図、形態、タッチ、リズム感等、全てが面白い作品です。岡田文化財団賞《notes_7》は、書かれた文字の束が虹のグラデーションのように発光する謎めいた美しさを有する作品です。すばらしきみえ賞《木守柿と蔓梅擬》は、素朴なタッチで隅々まで丁寧に描かれ、郷土の風景に対する愛着を感じさせる堂々とした作品です。for your Dream 賞《渦》は、ぐるぐると渦巻きながら変容する大蛇のデザインが面白く、テーマに従って主題や色彩がうまく構築されている良い作品です。ニュージェネレーション・自然の恵み賞《前進》は、写真的に強調されたパースペクティブでスッキリと描かれた完成度のある作品です。

その他にも入賞作品に引けを取らない良い作品が多数あったことをここに記しておきます。

洋画部門審査主任
岡田修二

彫刻部門審査評

彫刻に取り組む環境は、素材、スペースなど年々厳しさを増す一方にもかかわらず、今回は前年の1.7倍と応募点数が倍増しました。木や金属の伝統素材から段ボールや発泡スチロール、樹脂といった人工素材まで、また細部にこだわったフィギアから大型のインスタレーションまで、素材も技法も多様性をみせながら、作者それぞれが物理的にも精神的にも誠実に、真摯に表現を追求する姿勢が見受けられ、気迫がみなぎる出品作が集まり、それに応じて創造的議論が深まる審査となりました。厳選された18点（入選率62%）が入選し、前回の入選率76%に比べると厳しい結果となりましたが、それほど優劣つけがたく質の高い作品が揃ったといえるでしょう。

最優秀賞《翔び続けたいージュラ紀からこの先もー》は、オーソドックスな金属加工技術を使いながらも新鮮な感性で、金属の無機質な表情から豊かな生命感まで多彩に引き出し、重量感と浮遊感を共存させ、技術、構成、コンセプトが高次元に結晶した作品として高く評価されました。

優秀賞(三重県議会議長賞)《時空を駆ける》は、流木材に陶磁製の龍の肢体が巻きつく様を造形化し、自然と人工、そしてリアルとアブストラクトを見事に昇華し一体化させた作品として注目に値します。

また、発泡スチロールと紙を素材に硬質で奥行きのある独自の作品世界を獲得している《黒い森》、荒々しい手法で強靱な造形のなかに洗練された批評性を垣間見せる《足元ヨシ！ヘルメットヨシ！闘争心ヨシ！》なども彫刻の表現世界の無限の可能性を予感させ好感をもちました。

今回の彫刻部門の多様性に富む作品群の風景は今後の本分野のさらなる発展につながるものと確信します。

彫刻部門審査主任
神戸峰男

工芸部門審査評

本年は 68 点の応募出品がありました。それらを 3 名の審査員がそれぞれ判定して、過半数（審査員 2 名）以上が「良」とした作品 48 点を入選としました。「良・否」の評価基準は、審査員個人の見識に委ねられるとはいえ表現の明快さをはじめ、素材の取扱いや技法の洗練を前提とした工芸的造形力を重視するという審美観にもとづいた「ものさし」に大差はありません。

つづいて入選作品を対象に審査員ごと 9 点の授賞候補作品を選抜して（重複して選抜された作品もあって）15 点を授賞対象としました。その後 15 点の作品を各審査員が順位付け（採点）し、その合計点数の上位 9 点の作品を対象に、点数順に以下のとおり授賞が決まりました。

樹葉の明るく細やかな表現で南国のさわやかな雰囲気を感じさせる清水禎子さんの《息づく》が最高点を得て最優秀賞となり、岡田文化財団賞には、素地土の物質的特性を活かした動勢の表現がすばらしい小原知恵さんの《手で動かしていく》としました。

つづいて、染色の色彩感覚と模様の繊細さに技の美が発揮された奥野香里さんの《草木染花織着物 プロムナード（臭木、月桂樹）》と、黄昏れたパリの街並のレリーフ表現に旅愁が重なる堀淳子さんの《モンマルトルの丘》とがともに優秀賞（前者が三重県議会議長賞、後者が三重県教育委員会教育長賞）を、そしてガラス細工によるキャラクター的表現が愉快的な藤原康行さんの《委ねられた星》に三重県市長会長賞が、また大小ブタの陶造形を連ねたインスタレーション、三浦伊佐夫さんの《輪廻転生》に三重県町村会長賞が授けられました。

さらに、すばらしきみえ賞に清やかな郷土の風景を伊勢型紙の彫り模様で象徴的に表現した佐藤利一さんの《小紋の郷景－刻－》、for your Dream 賞は陶造形パーツのパターン展開で物語性を紡ぎ出した赤繁容子さんの《主と十二使徒》、結びのニュージェネレーション・自然の恵み賞には、トーテムやタトゥーを思わせる文様で朴訥な世界観を表現した大西俊治さんの《響き踊る鈴杯》がそれぞれ選ばれました。

綺麗に整っていない、野太く力強いかたちに人は心惹かれることがあります。それは、そこに「生」に対する緻密な重層と未来への展望が、なにかしら感じられるからでしょう。今回の受賞作 9 点は、いずれもこのような旺盛な生命を感じさせる工芸的造形の魅力に溢れたかたちばかりでした。

今回応募出品されたすべての皆さんが、その豊かな感受力をより飛躍的に表現されますよう期待しています。

工芸部門審査主任
石崎泰之

写真部門審査評

今年も県展の季節がやってきました。写真部門には約 250 点もの作品が集まり、5 月 14 日の公開審査会も熱気で包まれました。作品のレベルは総体的に高く、写真家の小松健一、勝又公仁彦の両氏と私による審査員にとって、ずいぶん悩ましい選考となりました。ただ、結果を見ると、いずれもキャリアのある応募者の作品が上位を占めています。これまでの成果に甘んじず、新たな創意を求める姿勢、かつて写真界の先人が「写真する心」と呼んだものを感じたしだいです。

最優秀賞の水口道成さんの《寂光》は、ロケーションの持つ魅力を演出によって幻想的なレベルにまで高めていました。優秀賞(三重県議会議長賞)の面野喜久郎さんの《年月の創作》は、古い鉄の扉の経年変化というモチーフから、繊細な処理によって抽象的な美しさを引き出しています。同じく優秀賞(三重県教育委員会教育長賞)の岸則和さんの《ポーズ》では、子どもの可愛さを、リズムカルな平面構成によっていっそう際立たせています。いずれも、見慣れた対象を画面内でシンプルに整理すると同時に、見知らぬ新たな表情を引き出しているのが特徴であり、写真にしか表現できないことを追求しているのです。もちろん他の入賞作についても同様のことは言えるのです。

いまや誰もが簡単に良い写真が撮れると思われがちな時代ですが「写真する心」によってここまで表現性が高められる。このことを、多くの来場者に知っていただきたいと願っております。

写真部門審査主任
鳥原学

書部門審査評

私自身みえ県展の審査によせていただくのは2度目となります。前回は10数年前でしたが、地方展にしてはレベルの高い作品が数多く見受けられたと記憶しております。

本年は出品点数も昨年より14点増となる153点の応募があり、どんな内容の作品が出品されているか期待感を持って審査に臨みました。伊藤仙游先生、弓野隆之先生と3人それぞれの審美眼で合議を重ね意見統一をはかり、慎重に入選・入賞作を決定いたしました。

以下に主な入賞作品の寸評を記します。

最優秀賞《王維詩》 漢字の基礎となる楷書作品ですが、線に力強さと迫力があり、紙面を支配するほどの圧倒的な生命力を感じさせる魅力的な作品。

優秀賞(三重県議会議長賞)《葉がくれに》 爽やかな連綿の中に横への動きも兼ね備え、墨の集団と疎密の美しさが際立つ作品。

優秀賞(三重県教育委員会教育長賞)《王維詩》 古典に立脚した行草体で筆力強く錬度の高さを感じさせる秀作。

岡田文化財団賞《五月雨》 読み易さの中に芸術性を宿し、白の美しい若さに溢れた魅力的な作品。

書は文字を媒体とした造形芸術です。その意味において造形・線・白が美しく表現された作品を中心に、入選・入賞作を決定いたしました。

書部門審査主任
黒田賢一